

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名はうち明けない。これは世間をはばかる遠慮というよりも、そのほうが私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起こすごとに、すぐ「先生。」と言いたくなる。筆を執っても心持ちは同じことである。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。そのとき私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いというはがきを受け取ったので、私は多少の金を工面して、出かけることにした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日とたたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに進まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するには余り年が若すぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談

をした。私にはどうしていいかわからなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼はもとより帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰ることになった。せっかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだだいぶ日数があるので、鎌倉においてもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分もとの宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかった。したがって独りぼっちになった私はべつにかっこうな宿を探すめんどうももたなかったのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長いなわてを一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるにはしごく便利な地位を占めていた。

私は毎日海へ入りに出かけた。古いくすぶり返ったわらぶきの間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いている。あるときは海の中が銭湯のように黒い頭でこちゃこちゃしていることもあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういうにぎやかな景色の中につつまれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね回るのは愉快であった。

私は実に先生をこの雑踏の間に見つけ出したのである。そのとき海岸には掛け茶屋が二軒あった。私はふとしたはずみからその一軒のほうに行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘をかまえている人と違って、めいめいに専有の着替え場をこしらえていないここのらの避暑客には、ぜひと

6 【鎌倉】現在の神奈川県鎌倉市。
6 【書生】学生。

5 【中国】中国地方のこと。
7 【かっこうな】望ましい条件に合っている。
9 【辺鄙な】都会から離れていて不便である。
9 【玉突き】ピリヤード。
9 【ハイカラな】西洋風でおしゃれな。
10 【なわて】田んぼ道。
10 【車】人力車。
10 【銭】貨幣の単位。円の一〇〇分の一。
18 【掛け茶屋】道端にすだれなどをさし掛けて、気軽に休息できるようにした茶屋。ここでは海水浴の更衣室を兼ねる。
19 【長谷】神奈川県鎌倉市南にある地名。

もこうした共同着替え所といったふうなものが必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する他に、ここで海水着を洗濯させたり、ここでしおはゆい体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあったので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ捨てることにしていた。

二

私とその掛け茶屋で先生を見たときは、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであった。私はそのとき反対にぬれた体を風に吹かして水から上がってきた。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかもしれない。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であったにもかかわらず、私がすぐ先生を見つけ出したのは、先生が一人の西洋人を連れていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛け茶屋へ入るやいなや、すぐ私の注意をひいた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々のはく猿股一つの他何物も肌に着けていなかった。私にはそれがだいいち不思議だった。私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻を降ろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ脇がホテルの裏口になっていたので、私のじっとしている間に、だいぶ多くの男が塩を浴びに出てきたが、いずれも胴と腕とももは出していなかった。女はことさら肉を隠しがちであった。たいていは頭にゴム製の頭巾をかぶって、えび茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう

ありさまを目撃したばかりの私の目には、猿股一つですましてみんなの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の脇を顧みて、そこにごんごんでいる日本人に、ひと言ふた言何か言った。その日本人は砂の上に落ちた手拭いを拾い上げているところであったが、それを取り上げるやいなや、すぐ頭を包んで、海の方へ歩きだした。その人がすなわち先生であった。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りてゆく二人の後ろ姿を見守っていた。すると彼はまっすぐに波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々とした所へ来ると、二人とも泳ぎだした。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いていった。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻ってきた。掛け茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ体を拭いて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出ていったあと、私はやはりもとの床几に腰を降ろしてたばこを吹かしていた。そのとき私はぼかんとしながら先生のことを考えた。どうもどこかで見たことのある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人か思い出せずにしまった。

そのときの私は屈託がないというよりむしろ無聊に苦しんでいた。それで明るく日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛け茶屋まで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦わら帽をかぶってやってきた。先生は眼鏡を取って台の上に置いて、すぐ手拭いで頭を包んで、すたすた浜を下りていった。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎだしたとき、私は急にそのあとが追いかけてなくなった。私は浅い水の上まで跳ねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目印に抜き手をきった。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられな

2 【しおはゆい】塩からい。
9 【放漫】気持ちが集まらない様子。
12 【床几】簡易な腰掛け。
13 【猿股】腰から股のあたりを覆う男子用の短い下着。
14 【由井が浜】相模湾に面する海水浴場。由比ヶ浜。
18 【頭巾】ここでは水泳帽のこと。
18 【えび茶】黒みがかった赤茶色。
18 【紺】濃い青色。
18 【藍】濃い青色。紺色よりも緑がかっている。

3 【ごんごむ】かがむ。
14 【屈託】いろいろと心配したり、こたわったりすること。
14 【無聊】楽しむことがなく退屈なこと。
19 【抜き手】顔を水面に出したまま、両手をかわるがわる水面から抜き出して水をかく泳ぎ方。

かった。私がおかへ上がってしずくの垂れる手を振りながら掛け茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出ていった。

三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じことを繰り返した。けれどもものを言いかける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起こらなかった。そのうえ先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰っていった。周囲がいくらにぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかった。最初一緒に来た西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。

あるとき先生が例のとおりさっさと海から上がってきて、いつもの場所に脱ぎ捨てた浴衣を着ようとすると、どうしたわけか、その浴衣に砂がいっぱいついていた。先生はそれを落とすために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振るった。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡のなくなったのに気がついたらとみえて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛けの下へ首と手をつき込んで眼鏡を拾い出した。先生はありがとうと言って、それを私の手から受け取った。

次の日は先生のあとに続いて海へ飛び込んだ。そうして先生と一緒にの方角に泳いでいった。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話しかけた。広い青い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より他になかった。そうして強い太陽の光が、目の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に満ちた筋肉を動かして海の中で躍りくるった。先生はまた

ぱたりと手足の運動をやめて仰向けになったまま波の上に寝た。私もそのまねをした。青空の色がぎらぎらと目を射るように痛烈な色を私の顔に投げつけた。「愉快ですね。」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか。」と言って私を促した。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われたとき、私はすぐ「ええ帰りましょう。」と快く答えた。そうして二人でまたもとの道を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちょうど三日めの午後だったと思う。先生と掛け茶屋で出会ったとき、先生は突然私に向かって、「君はまだだいぶ長くここにいますつもりですか。」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中にたくわえていなかった。それで「どうだかわかりません。」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見たとき、私は急にきまりが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出した先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を訪ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でないこともわかった。私が先生、先生と呼びかけるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言って弁解した。私はこのあいだの西洋人のことを聞いてみた。先生は彼の風変わりのところや、もう鎌倉にいないことや、いろいろの話をした末、日本人にさえ余りつきあいをもたないのに、そういう外国人と近づきになったのは不思議だと言ったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生

1 【おか】陸地。
6 【超然】普通の人が気にするようなことを全く気にしない様子。
12 【白緋】白地に紺または黒のかすり模様のある着物。
12 【兵児帯】生地が柔らかく、幅の広い帯。
16 【丁】長さの単位。一丁は約一〇九メートル。「町」に同じ。

を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと言った。若い私はそのとき暗に相手も私と同じような感じをもってはいはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか。」と言ったので私は変に一種の失望を感じた。

四

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き揚げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れるときに、「これからおりおりお宅へ伺ってもよござんすか。」ときいた。先生は単簡にただ「ええいらっしゃい。」と言っただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からももう少しまやかな言葉を予期してかかったのである。それでこのもの足りない返事が少し私の自信をいためた。

私はこういうことでよく先生から失望させられた。先生はそれに気がついているようでもあり、また全く気がつかないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れてゆく気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に動かされるたびに、もっと前へ進みたくなつた。もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか目の前に満足に現れてくるだろうと思つた。私は若かつた。けれども全ての人間に対して、若い血がこう素直にはたらくとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持ちが起るのかわからなかつた。それが先生の亡くなつた今日になって、初めてわかつてきた。先生ははじめから私を嫌つていたのでなかつたのである。先生が私に示した時々のもつけない挨拶や冷淡に見える動作は、

私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。いたましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだからよせという警告を与えたのである。人の懐かしみに応じない先生は、人を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰つてきた。帰つてから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行つておこうと思つた。しかし帰つて二日三日とたつうちに、鎌倉にいたときの気分がだんだん薄くなつてきた。そうしてそのうえに彩られる大都會の空気が、記憶の復活に伴う強い刺激とともに、濃く私の心を染めつけた。私は往來で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生のことを忘れた。

授業が始まつて、一か月ばかりすると私の心に、また一種のたるみができてきた。私はなんだか不足な顔をして往來を歩き始めた。もの欲しそくに自分の部屋の中を見回した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

初めて先生のうちを訪ねたとき、先生は留守であつた。二度めに行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身にしみ込むように感ぜられるいい日和であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいたとき、私は先生自身の口から、いつでもたいていうちにいるということを知っていた。むしろ外出嫌いだということも聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉で思い出して、わけもない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へ入つた。すると奥さんらしい人が替わつて出てきた。美しい奥さんであつた。

私はその人から丁寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にあるある仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「たつた今出たばかりで、十分になるか、

3 【沈吟】 考えこむこと。

7 【単簡】 簡單。

16 【下女】 雇われて家事や雑用をする女性の使用人。

17 【躊躇する】 ためらう。

19 【雑司ヶ谷の墓地】 現在の東京都豊島区にある墓地。

ならないかでございます。」と奥さんは気の毒そうに言ってくれた。私は会釈して外へ出た。にぎやかな町の方へ一丁ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐきびすをめぐらした。

五

私は墓地の手前にある苗畑の左側から入って、両方にかえてを植えつけた広い道を奥の方へ進んでいった。するとその外れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出てきた。私はその人の眼鏡の縁が日に光るまで近く寄っていった。そうしてだしぬけに「先生。」と大きな声をかけた。先生は突然立ち止まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……。」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。その言葉は森閑とした昼のうちに異様な調子をもって繰り返された。私は急になんとも答えられなくなった。

「私のあとをつけてきたのですか。どうして……。」

先生の態度はむしろ落ち着いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情のうちにははっきり言えないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行ったか、妻がその人の名を言いましたか。」

「いいえ、そんなことは何もおっしゃいません。」

「そうですか。——そう、それは言うはずがありませんね、初めて会ったあなたに。言う必要が

ないんだから。」

先生はようやく得心したらしい様子であった。しかし私にはその意味がまるでわからなかった。先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉なににの墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍らに、「一切衆生悉有仏生」と書いた塔婆などが立ててあった。全権公使になにというのもあった。私は安得烈と彫りつけた小さい墓の前で、「これはなんと読むんでしょう。」と先生にきいた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね。」と言って先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が表す人さまさまの様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりにかれこれ言いたがるのを、はじめのうちは黙って聞いていたが、しまいに「あなたは死という事実をまだ真面目に考えたことがありませんね。」と言った。私は黙った。先生もそれぎりなんとも言わなくなった。

墓地のくぎりめに、大きないちようが一本空を隠すように立っていた。その下へ来たとき、先生は高いこずえを見上げて、「もう少しすると、きれいですよ。この木がすっかり黄葉して、こいらの地面は金色の落ち葉でうずまるようになります。」と言った。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向こうのほうで凸凹の地面をならして新墓地を造っている男が、くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へきれてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くというあてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いていった。先生はいつもより口数をきかなかった。それでも私はさほどの窮屈を感じなかったので、ぶらぶら一緒に歩いていった。

「すぐお宅へお帰りですか。」

3 【きびすをめぐらす】引き返す。

10 【森閑】物音一つしない様子。

3 【依撒伯拉】スペイン語の「イサベル」の英語式発音に漢字を当てたもの。

3 【神僕】神のしもべ。キリスト教信者が自分を低めていう言葉。

4 【一切衆生悉有仏生】人間は皆、心の中に仏の性質をもっているという意味。「生」は正しくは「性」と書く。

4 【塔婆】卒塔婆。梵字や経文などを記し、墓の後ろに立てる細長い板。

4 【全権公使】国家の意思を示すために、外国へ派遣される外交官。

7 【アイロニー】皮肉。

8 【御影】御影石のこと。石材としての花崗岩をこのようにいう。

「ええべつに寄るところもありませんから。」

二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか。」と私がまた口をききだした。

「いいえ。」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか。」

「いいえ。」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切りあげた。すると一町ほど歩いたあとで、先生が不意にそこへ戻ってきた。

「あすこには私の友達の墓があるんです。」

「お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか。」

「そうです。」

先生はこの日これ以外を語らなかった。

六

私はそれからときどき先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であった。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますますしげく先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をしたときも、懇意になったそののちも、余り変わりはなかった。先生はいつも静かであった。あるときは静かすぎて寂しいくらいであった。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づ

かなければいけないという感じが、どこかに強くはたらいた。こういう感じを先生に対してもっていた者は、多くの人のうちであるいは私だけかもしれない。しかしその私だけにはこの直感が後になって事実のうえに証拠立てられたのだから、私は若々しいと言われても、ばかげていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまたうれしく思っている。人間を愛しうる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手を広げて抱きしめることのできない人、——これが先生であった。

今いったとおり先生は始終静かであった。落ち着いていた。けれどもときとして変な曇りがその顔を横切ることがあった。窓に黒い鳥影がさすように。さすかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が初めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼びかけたときであった。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちょっと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞にすぎなかった。私の心は五分とたないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春の尽きるに間のないある晩のことであった。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれたいちょうの大樹を目の前に思い浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例として墓参に行く日が、それからちやうど三日めにあたっていた。その三日めは私の課業が昼で終える楽な日であった。私は先生に向かってこう言った。

「先生雑司ヶ谷のいちょうはもう散ってしまっただけでしょうか。」

「まだ空坊主にはならないでしょう。」

先生はそう答えながら私の顔を見守った。そうしてそこらしばし目を離さなかった。私はす

7 【町】長きの単位。一町は約一〇九メートル。

11 【結滞】正常な脈拍が乱れること。

12 【ゆくりなく】思いがけなく。

13 【小春】陰曆十月のこと。

16 【課業】やるべき学業。

19 【空坊主】木の葉などが全て落ちること。

ぐ言った。

「今度お墓参りにいらっしやるときにお供をしてもよござんすか。私は先生と一緒にあすこいらが散歩してみたい。」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ。」

「しかしついでに散歩をなすたらちようどいいじゃありませんか。」

先生はなんとも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから。」と言って、どこまでも墓参りと散歩を切り離そうとするふうに見えた。私と行きたくない口実だかなんだか、私にはそのときの先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでもいいから一緒に連れて行ってください。私もお墓参りをしますから。」

実際私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉がちよっと曇った。目のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片づけられないかすかな不安らしいものであった。私はたちまち雑司ヶ谷で「先生。」と呼びかけたときの記憶を強く思い起こした。二つの表情は全く同じだったのである。

「私は。」と先生が言った。「私はあなたに話すことのできないある理由があって、人と一緒にあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ連れていったことがないのです。」

七

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でそのうちへ出入りをするのではなかった。

私はただそのままにしてうち過ぎた。今考えるとそのときの私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らしい温かいつきあいができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かって、研究的にはたらきかけたなら、二人の間をつなぐ同情の糸は、なんの容赦もなくそのときふつりと切れてしまったろう。若し私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちてきたろう。私は想像してもぞっとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生のうちへ行くようになった。私の足がだんだんしげくなったときのある日、先生は突然私に向かってきいた。

「あなたはなんでそうたびたび私のような者のうちへやってくるのですか。」

「なんでと聞いて、そんな特別な意味はありません。——しかしおじやまんですか。」

「じゃまだとは言いません。」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生のつきあいの範囲の極めて狭いことを知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいる者はほとんど二人か三人しかないということも知っていた。先生と同郷の学生などにはときたま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもはみんな私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は寂しい人間です。」と先生が言った。「だからあなたの来てくださることを喜んでいますが、だからなぜそうたびたび来るのかと言ってきいたのです。」

「そりやまたなぜです。」

私がこう聞き返したとき、先生はなんとも答えなかった。ただ私の顔を見て「あなたはいくつ

ですか。」と言った。

この問答は私にとってすこぶる不得要領のものであったが、私はそのとき底まで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日とたたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るやいなや笑いだした。

「また来ましたね。」と言った。

「ええ来ました。」と言って自分も笑った。

私は他の人からこう言われたらきつと癩に障ったろうと思う。しかし先生にこう言われたときは、まるで反対であった。癩に障らないばかりでなくかえって愉快だった。

「私は寂しい人間です。」と先生はその晩またこのあいだの言葉を繰り返した。「私は寂しい人間ですが、ことによるとあなたも寂しい人間じゃないですか。私は寂しくっても年をとっているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうはいかないでしょう。動けるだけ動きたいのでしよう。動いて何かにぶつかりたいのではありませんか……。」

「私はちっとも寂しくはありません。」

「若いうちほど寂しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私のうちへ来るのですか。」

ここでもこのあいだの言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会っても恐らくまだ寂しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその寂しさを根もとから引き抜いてあげるだけの力がないんだから。あなたは他のほうを向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私のうちのほうへは足が向かなくなります。」
先生はこう言って寂しい笑い方をした。

2 【不得要領】 要領を得ないこと。

7 【癩に障る】 いまいましく、いらいらする。

〈出典 『夏目漱石全集8』(筑摩書房、一九八八年)〉

【著者】夏目漱石(なつめ そうせき)

一八六七(慶応三)年―一九一六(大正五)年

作家。東京都の生まれ。

【著書】『こころ』『草枕』『それから』など